



Save The Earth

地球温暖化について

地

地球上の人口が増加し文明の利器が開発され、人間の活動が盛んになるに従って自然破壊が急速に進んできました。それに伴って野生の生物たちは居場所が狭くなって私達の周辺を見回しても動植物の種類の数、個体の数がどんどん減っていくような気がします。

IUCN(国際自然保護連合)レッドリストによると、このまま対策を採らないならば100年以内に1万6000種以上の野生生物が地球上から姿を消すことが分かりました。

これまでの地球上では150万種以上の動植物が発見されていますが、これ以外にまだまだ1000万〜3000万種の生物が存在すると考えられています。したがって、我々の知らないところで多くの生物が絶滅の危機にさらされていると考えられます。

地球上に生物が出現し、多様化して消えていくというのは、今までの生物の歴史を考えると自然界の摂理と言っているでしょう。古代にはバクテリアやランソウ類などの単細胞生物が、古生代(約6億年前)になると急に分化、発展し、爆発的に種の数が増え現在居る生物の祖先は勿論、現在生存してい

ないような生物も沢山勢揃いしました。しかし、古生代末(約2億5千万年前)になるとその90%近くが絶滅したといわれています。

中生代になると又新しい生物、特に爬虫類、魚類、軟体動物が隆盛を極めますが、中生代末(6千500万年前)になると白亜紀末の大絶滅といわれ、恐竜類をはじめ、あんなに栄えたアンモナイト、サシカク貝など滅びてしまいます。このように地球上の生物は正に栄枯盛衰を繰り返してきたのです。

それで種の1万や2万絶滅しようとしているといっても特に驚く必要はないと思うのですが、問題は時の流れの期間の長さです。1つの種が出現して絶滅したりするのに要する時間は少なくとも数10万〜数100万年はかかると考えられています。現在の絶滅スピードは自然の状態の100〜10000倍と考えられています。これはやはり野生の生物が生息する環境汚染、外来種による生態系の破壊、人間による乱獲、山林・河川の破壊が原因であると思われます。

私達の身近な問題としては戦前小学校の修身の本に載っていた「狼と少年」の話がありますが、明治時代まで九州にも生息していたニホンオオカミは既に絶滅しました。

最近話題になった日本のトキやニホンカワウソは絶滅しようです。それにツキノワグマも九州にはいないようです。絶滅危惧種に指定されているニホンカモシカは数年前、私の友人が球磨の山中でやっと撮影することが出来ました。ムジナ(あなぐま)やキツネも本町では殆ど見なくなりました。

2010年10月には名古屋市中「生物多様性条約第10回締約国会議」(COP10)が開かれましたが、先進国と発展途上国との利害関係による対立ばかりが目立ちました。議長国として、日本の環境相が「名古屋議定書」を何とかまとめ採択されました。50ヶ国が批准しましたが、これから先どれだけ実行されるかが問題です。

歴史調査の楽しみ方

日平城跡 14

ひびくうめ

日

平城跡の基本的な縄張りなわばりをおさります。本体部分は、I郭の山頂を中心とし

た主軸尾根です。山北(玉東町)の南側から、北側先端部に向かって、痩せ馬地形が延びています。山城とし

ての遺構は、Ⅰ郭から南側に少し下ったⅢ郭と、その周囲に集中しています。Ⅰ郭は岩山ですが、Ⅲ郭に岩盤の露頭がありません。掘り抜き井戸、Ⅲ郭下を巡る空堀、Ⅴ郭との間を遮断する大規模堀切が目を引きま
す。特に堀切は、南側と北東側の山腹側で、大規模堅堀に変化していま
す。この主軸尾根は、山北側で蜻浦
集落から登る林道の終点地と交わり
ます。その接点箇所に、武者溜まり
があります。

この主軸尾根からは、東下の蜻浦集落へ2本と西下の日平集落へ1本、計3本の派生尾根が延びています。東側は、山頂から下る城山ラインと、現在調査中のⅥ郭下から延びるラインです。西側の派生尾根は、これからの調査となります。

今回は、VI郭から延びる派生尾根を説明します。まず、主軸尾根から

枝分かれした箇所ごうくわいけに「五郎者池」の大穴があります。水は枯れていますいが、Ⅲ郭の井戸と全く同じ形です。以前に報告しました様に、地元の方は「馬に水を飲ませた井戸」と証言されています。

Ⅵ郭からの派生尾根は、調査前、一面の藪に覆われていました。これを奥井孝さんや筑紫巖さん徳永志誠さん達が、猛スピードで伐採されました。その結果、はっきりとした地形が把握はあくできました。痩せ馬地形の派生尾根は、穏やかに下り、はっきりとした山道に残っていたのです。

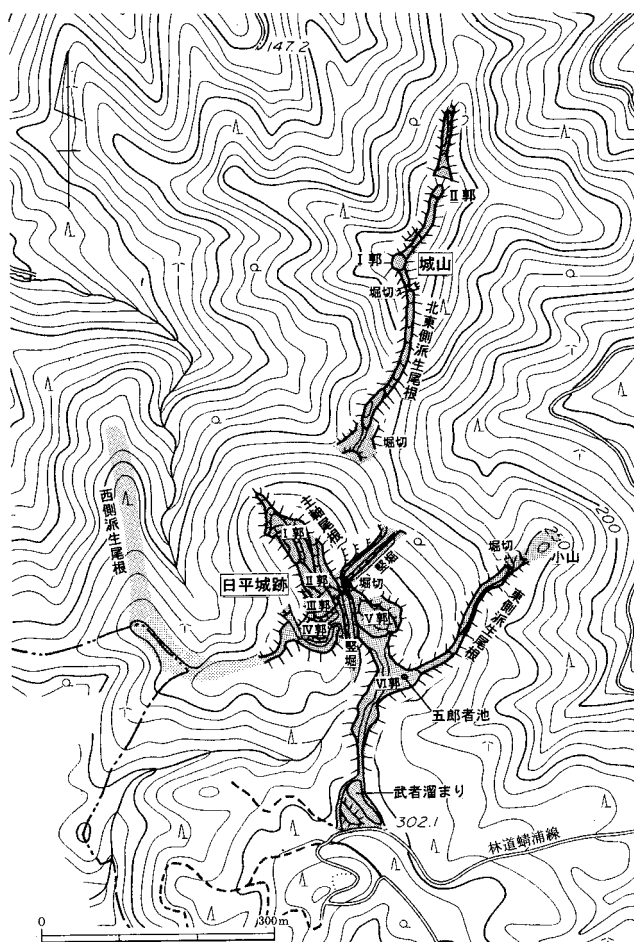
小谷には、谷部の北側半分を掘り、窪めた堀切がありました。そして、これまで下ってきた山道が、この堀切を通じて、さらに、山腹の谷間を下る事がわかりました。蜻浦集落へ向かっている事は明らかです。

ここで、私は『肥後国誌』に書かれた筒ヶ岳城跡(荒尾市)の記事を思い出しました。これも、日平城跡と同じ大規模山城です。麓からの高低差は、筒ヶ岳城跡が380・1m、日平城跡が287・2mです。

「(城には)大手東に向かい、田原村より上がる。一の堀まで、兵糧を馬に担わせて上がり、それより上は馬で運べないという。」とても興味深い記述です。

私は、この派生尾根の山道こそが日平城へ兵糧を運んだ馬道ではないかと考えています。地元の証言とも合います。確かに、城山ルートでは、地形が険しいので馬を使った物資の搬入ができません。

最後の小山は、絶景の地で、北方には萩原城跡と萩原地区が望めます。また、北側は、谷を挟んで、城山が眼前に迫っています。城山に面した小山斜面の小段が印象的でした。



日平城跡周辺地形図

熊本県立装飾古墳館館長

大田幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)